

まえがき

『台湾の日本語教科書と中国語会話書の研究—昭和20年まで—』という書名で本書を出版しました。令和3年となった現在も、世界的にデジタル化が促進されています。つい1、2年前までは、国立台湾図書館（台湾新北市中和区）の6階にある「台湾学研究中心」（台湾学研究センター）に通って、閉館間際まで資料を複写していました。それが、新型コロナウイルスの世界的蔓延により、台湾に赴くことすら叶わなくなりました。研究を一時中断すべきか否か迷ったとき、ふと国立台湾図書館ホームページの「公告」（おしらせ）を見ると、何やら、資料が館外でも閲覧できるようになることが書いてありました。半信半疑でクリックし、国立台湾図書館内で設定したIDとパスワードを入力すると必要な資料が自宅で見られるようになっていました。それからまた研究を再開し、書籍という表現方法を使って、研究成果を公開することにしました。昨年上梓した拙著『日清戦争以前の日本語・中国語会話集』も書籍化したことにより細部までご覧いただけたという経緯も踏まえています。普段インターネットは使わないという方も、巻末に国立国会図書館デジタルコレクションの写真版を参考資料として載せましたので、中国語会話書や台湾の日本語教科書のイメージがつかめると思います。また、新北市の国立台湾図書館や台北市の国家図書館にある資料にも関心を持っていただけたら、インターネットに接続すれば、簡単に自宅から画像を確かめることが可能です。本書を手にとっていただき、少しでも研究の現状が伝われば、研究成果の公開という大きな目的が達せられたこととなります。内容は多岐にわたりますので、どこからでも興味関心の持てるところからご覧いただければ幸いです。巻末の写真版を眺めてから、第1部第5章第6章あたりを読んでもみるのもお勧めです。日本語学（日本語史・日本近代語）、日本語教育学（日本語教育史）の分野における資料研究と多様な日本語の分析が目的です。中国語教育史、中国語学の知見も活用しています。第二言語教育、国語教育、教育学、社会学、歴史学、台湾学、日本文学等隣接分野とも関わる学際的な研究です。本書から新たな研究が芽生えることも期待しています。

凡 例

- 一、本書全体を横書きに統一した。
- 一、注は各章末に示した。
- 一、引用は原文どおりとすることを旨とした。誤字である可能性が考えられる例も修正はせず、「ママ」あるいは「原文のまま」という注記を付して示した。
- 一、原文の漢字字体は、いわゆる旧字体のほか様々な字体が現れている。引用に際しては、できる限り日本における現行の通行字体に統一した。
- 一、引用に際しては、原文の仮名表記に従った。平仮名、片仮名の違いも原文どおりとした。仮名遣いも歴史的仮名遣いあるいは現代仮名遣いに統一することはしなかった。ただし、二字分の踊り字や合字は現行の仮名に改めた。
- 一、原文に振り仮名がある場合の引用の仕方は、振り仮名を漢字の後に（ ）を用いて「国光（クニノヒカリ）」「国光（コクワウ）」「国光（こつこう）」「自宅（オウチ）」のように統一した。
- 一、本文中の引用文献は、原則として雑誌論文等初出のものを示した。初出論文は後に論文集や単行本に収められることがある。内容については、ほぼ同じものから大幅に書き換えられているものまでさまざまである。参考文献欄には、気づいた限り単行本も載せるようにした。

序 章

本書は『台湾の日本語教科書と中国語会話書の研究—昭和20年まで—』という書名で、以下の3部構成とした。

第1部 台湾における日本語教科書と日本語資料

第2部 日清韓会話書・台湾語会話書の成立と中国語方言会話書への展開

第3部 中国語会話書（北京官話会話書）の成立と展開

日本語学（日本語史・日本近代語）、日本語教育学（日本語教育史）の分野における資料研究と多様な日本語の分析において新知見をもたらすことを目的としている。中国語教育史、中国語学の知見を活用し、第二言語教育、国語教育、教育学、社会学、歴史学、台湾学、日本文学等隣接分野とも関わる学際的な研究である。

そもそもの研究のきっかけは、二十数年前に、巻末の「中国語会話書一覧」にも載せた『亜細亜言語集 巻一』（初版本）等を東北大学狩野文庫蔵本で見えて、これらの資料が中国語学や中国語教育史の分野だけでなく、日本語学や日本語教育史の分野でも使えないだろうかと考えたところにある。最初期のものから順に調べていったが、当時は、まだ国立国会図書館デジタルコレクションもなく、実際に国立国会図書館まで赴くことが多かった。しかも、中国語学の分野の研究もまだ途上で、トーマス・ウェードの著作である『問答篇』（1860）の存在も知られていなかった。同じくトーマス・ウェードの著作である『語言自邇集』（1867）の初版本も簡単に見ることができなかった。そのため、『語言自邇集』と『総訳亜細亜言語集』、『参訂漢語問答篇国字解』との語句対応表を途中まで作ったのであるが、未完成に終わっていた。そこに、内田・氷野・宋（2015）の研究が現れ、正確な語句対応表が作れるようになった。平成30（2018）年、銘伝大学（台湾）での招待講演の折りには、『問答篇』『語言自邇集』『総訳亜細亜言語集』『参訂漢語問答篇国字解』の中国語と『総訳亜細亜言語集』『参訂漢語問答篇国字解』の日本語、計6種を対照させた研究を発表した。これも含め、『日清戦争以前の日本語・中国語会話集』（以下「前著」）を上梓した。日本語史、日本語教育史、さらには、中国語教育史の分野に一定の新知見をもた

らしたと考えている。

以下、研究を行ってきた時系列をもとに、第3部、第2部、第1部の順に述べる。なお、本書は、より最近の研究を先に出す意図をもって構成している。この点、「台湾」を出発点とする多くの先行研究とスタンスを異にしており、重点を置いて調べた内容も独自のものがある。

まず第3部であるが、ここでは、中国語会話書（北京官話会話書）の成立と展開について論じる。前著を含め、中国語教育史を概観し、江戸時代の唐話（南京官話）教育から明治9～10年に北京官話教育へと転換し、終戦を迎える昭和20（1945）年までを扱うことにする。中国語会話書のうち特に中国の標準語となった北京官話に関する北京官話会話書を資料としている。明治期には、日本語史の資料として一定の価値がある。『総訳亜細亜言語集』などは、中国語母語話者が日本語学習のために使ったという述懐もなされていることから、漢字等の母語の知識が正の転移として活用できる中国語母語話者への日本語教育を考える上で、日本語教育史でも考慮しなければならない資料であると考えられる。大正期、昭和前期の資料は、多様な日本語の分析という点で、一度は誰かが詳しく調べてみる必要があるものである。

『官話指南』（明治15年刊）は、日本人が作った中国語会話書であり、西洋や中国でも使われた。ただし、中国語のみなので、明治前期のものには含まれていない。日本語が現れる資料としては『官話指南総訳』『東語士商叢談便覧』『談論新編訳本』『談論新編総訳』『官話急就篇総訳』『官話急就篇詳訳』『急就篇を基礎とせる支那語独習』『急就篇総訳』の8編を扱う。このうち特に『官話指南総訳』では、小説類には現れないような公的交渉の場面が数十ページに亘って現れている。しかもこのような場面に「しめ」「し」「たる」等の文語が現れる。文語が混じることについては種々議論がなされているが、実際に口語的な文脈の中に文語を交ぜて使ったと考えてよい。このような考察は中国語会話書を使わなければならないことであり、日本語資料として中国語会話書が不可欠であると言え、本研究の意義は大きい。第7章では、『官話急就篇』『急就篇』訳述書に現れる質問表現について論じる。第8章から第10章にかけては、当為表現のうち、特に、二重否定型を取り上げる。周辺の当為表現の現れ方について詳しく見たところ、『東語士商叢談便覧』には、小説類にさきがけて「～なけ

ればだめです」のような例が現れていることが分かった。これは中国語会話書を調べなければ明らかにできないことである。当為表現を指標として調べてみると、当時の小説や国定教科書、日本語教科書とも異なった表現が中国語会話書に現れている。

第2部・第3部は、中国語会話書を資料とした研究である。

中国語会話書は、日本語会話書、英語会話書、仏語会話書、独語会話書、露語会話書、朝鮮語会話書、馬來語会話書等各国語会話書と同じく会話書の下位分類として捉えることができる。また、中国語会話書の下位分類（方言会話書）としては、北京官話会話書、南京官話会話書、台湾語会話書、広東語会話書、海南語会話書等中国語の方言会話書が考えられる。

最終的には日本語との関わりで考えている。例えば、『官話指南』（明治15年刊）は、日本人が作ったものであるが、中国語のみの会話書である。これも中国語会話書と呼ぶが、直接日本語の研究には結びついてこない。そこで、より重要になってくるのは、この改訂版『改訂官話指南』（明治36年刊）を訳した『官話指南総訳』（明治38年刊）の方である。こちらは、単独では、日本語のみで書かれている。ただ、これらは密接に関わっていると言える。

三つ以上の言語が関わる会話書も存在する。明治20（1887）年4月に刊行された『四国会話』は「一名・世界独行自在」と併記され、日本語、中国語、英語、フランス語の四つの言語を対照させた日中英仏会話書である。明治21（1888）年12月刊行の『日漢英語言合璧』は、日本語、中国語、英語が関わる日中英会話書である。日清戦争期には日清韓会話書が現れ、日本語、中国語、朝鮮語が対照される。日露戦争期には、『日清露会話』（明治37年9月14日発行、粕谷元・平井平三著、文星堂）のように、日本語、中国語、ロシア語を対照させた会話書が現れる。中国語が含まれていれば、中国語会話書の下位分類（多言語会話書）となる。中国語は含まれていないが、後の中国語会話書に影響を与える等密接に関係があるもの（『兵要朝鮮語』等）は、関連会話書と言える。

第2部では、日清韓会話書・台湾語会話書の成立と中国語方言会話書への展開について論じる。日清韓会話書の成立には、朝鮮語会話書が大きく関わっている。『兵要朝鮮語』が著され、これとほぼ同様の形式で『兵要支那語』が出版される。『兵要支那語』の初版に現れる言葉は、増訂再版本が出るときに修

正もされている。このような資料の成立に関わる研究は、日本語史の中で重要な位置を占める。また、台湾語会話書は、中国語会話書の中で北京官話会話書を除くと最もまとまった中国語の方言会話書となる。しかも、台湾で著されることが多く、内地では珍しい物の名前が日本語で記される。このことから、一時的に拡大した多様な日本語を考察する視点からは、不可欠で貴重な日本語史の資料であると言える。この資料の研究は、日本近代語研究の中で重要な位置を占めるものである。

台湾における日本語教科書が生まれるきっかけは、日清戦争につながる朝鮮をめぐる争いから始まる。このとき朝鮮語会話書、そして日清韓会話書が生まれる。日清韓会話書は中国語会話書の下位分類にあたる会話書であるが、この成立に関しては、第3章で論じる。明治前期の中国語会話書で「です」の詳細を調べてあるので、これとのつながりから、指定丁寧表現・形容詞丁寧表現を手がかりとして日清韓会話書を見ていく。明治初年の日本語会話書も比較資料として見る。日清戦争終結とともに、台湾では、日本語教科書（国語教科書）が作られ、台湾語会話書が著される。日本語教科書については第1部で述べるので、第2部では台湾語会話書について見る。第4章では、ごく初期のものを扱う。第5章では、第1部で扱う日本語教科書と同じ時期の台湾語会話書を含め、21種を補う。この他、台湾が何かしら関わってくる広東語会話書、海南語会話書に触れる。海南語会話書の成立には、馬來語会話書等の関連会話書が関わってくる。

第1部では、拡大した地域のうち、台湾における日本語教科書と日本語資料に焦点を当て、多様な日本語の分析を行う。主に昭和前期における国語普及の三大雑誌『国光』『黎明』『薫風』（『薫風』は後に『青年之友』と改題される）と『新国語教本』、『新国語教本教授書』、およびその教授細目、指導細案の分析を行う。これらの資料に見られる多種多様な日本語を分析することで、日本語史の面では、当時の広がりを持った日本語の一端を明らかにすることができる。日本語教育史の面では、昭和前期に台湾で日本語がいかに教えられ学ばれたか、従来の国語読本や制度のみの研究では分からなかったことを明らかにすることができる。第1章では、明治28（1895）年から昭和20（1945）年に至るまでの台湾における日本語教育（国語教育）について概観する。国語講習所関連を中心に

昭和前期の図書を示す。また、国立台湾図書館で公開されている322種の日本語関連雑誌についても触れる。戦後への展開として、北京官話を日本語で学ぶ新中国語会話書についても若干触れたい。第2章から第6章では、青年劇や地震の記事、投稿文の誤文訂正、仮名導入前の日本語指導、規範としての女性語、日本語の発音指導について考える。

参考資料

本書では、三部に分けて様々な資料の書誌的事項を提示し、日本語や中国語、台湾語について分析した。活字にしてしまうとイメージがつかめない点もあるので、国立国会図書館デジタルコレクションの中で著作権上転載許諾が得られた資料を何点か紹介する。これらは、国立国会図書館のホームページからアクセスすれば、調べたい書籍一冊全てを無料で閲覧することができる（一部の資料は、一冊全てをダウンロードすることも可能である）。

ここに掲げた資料を含め、本書の研究テーマに関わる資料が大規模に公開されている図書館を紹介すると、以下の三箇所（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）が挙げられる。規模を問わなければ、この他にも無数の図書館で公開されているのだが、まずはこの三箇所を見ると全体像は把握できる。さらに詳しい調べ方は、国立国会図書館（二〇二〇）「台湾所在の植民地期日本関係資料の調べ方」（更新日：二〇二〇年六月二二日）を参照されたい（参考文献に記した）。令和二年度からは、デジタル化されたものの公開が急速に進んでいる。国立国会図書館（二〇二〇）（更新日：二〇二〇年六月二二日）に前後して、国立台湾図書館では、二〇二〇年六月二二日に最新の「公告」（おしらせ）を出し「台湾学数位図書館」（台湾学デジタル図書館）から「日治時期図書影像系統」（日本統治期図書デジタル画像システム）、「日治時期刊影像系統」（日本統治期雑誌デジタル画像システム）等にアクセスできる旨の最新情報を公開している。毎月のように最新の利用案内が各図書館で出されているので、今後こまめに最新情報を確認する必要がある。もちろん、新資料の探索やデジタル化された資料の再吟味（初版か再版か等）は重要なことであり、筆者も取り組んでいる。ただ、これだけ膨大な資料が公開される時代になると、これからの研究にはデジタル化資料の閲覧は必須となるはずである。

今後、日本語学（日本語史・日本近代語）、日本語教育学（日本語教育史）に限らず、第二言語教育、教育学、社会学、歴史学、台湾学、日本文学のような隣接する様々な分野からの研究が進むことを期待している。

I 国立国会図書館デジタルコレクション

「インターネット公開（保護期間満了）」とあり、国会図書館のホームページでも申請の必要がない旨明記されている資料はそのまま載せた。「インターネット公開（裁定）」とあり、申請が必要な資料は、国会図書館に正式に申請し許可が得られたものをここに掲載した。

多くの資料が、特別な手続きなしに無料で閲覧・ダウンロード可能である。

II 国立台湾図書館 「台湾学数位図書館」(台湾学デジタル図書館)

「日治時期図書影像系統」(日本統治期図書デジタル画像システム)

「日治時期期刊影像系統」(日本統治期雑誌デジタル画像システム)

国立台湾図書館のホームページから、「台湾学数位図書館」(台湾学デジタル図書館)に入り、さらに「日治時期図書影像系統」(日本統治期図書デジタル画像システム)、「日治時期期刊影像系統」(日本統治期雑誌デジタル画像システム)等にアクセスする。

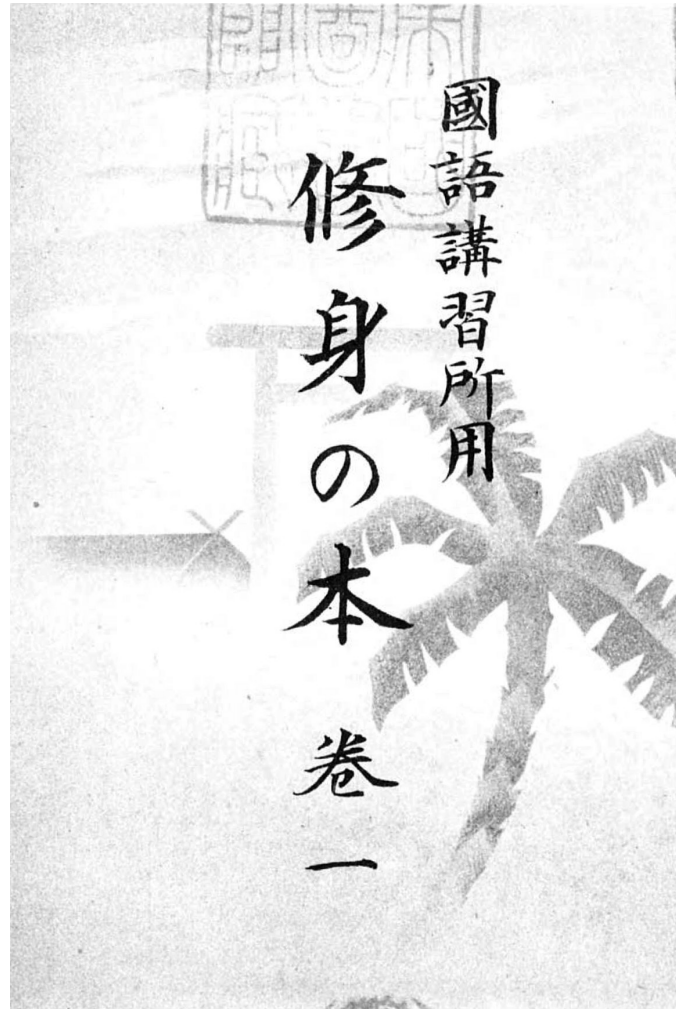
一定の手続きを取れば、日本(自宅等)からでも、無料で調べたい書籍一冊全ての閲覧、ダウンロード、印刷が可能である。

III 国家図書館(台北市) 「台湾華文電子書庫」(台湾eブック)

国家図書館(台北市)のホームページから「台湾華文電子書庫」(台湾eブック)に入って検索すれば、特別な手続き無しで、日本(自宅)から、無料で調べたい書籍一冊全ての閲覧が可能である。

目次

| | | |
|-----|--|--------------|
| (1) | 【第一部第一章】『国語講習所用修身の本』(巻二) 昭和17年6月23日発行(初版)、新竹州編、立川文明堂 | 005 } 008 |
| (2) | 【第一部第一章】『国語講習所用読方の本』(巻二) 昭和17年6月23日発行(初版)、新竹州編、立川文明堂 | 009 } 013 |
| (3) | 【第一部第一章】『国語講習所用読方の本』(巻二) 昭和17年6月23日発行(初版)、新竹州編、立川文明堂 | 014 } 020 |
| (4) | 【第一部第一章】『国語講習所用読方の本』(巻三) 昭和17年6月23日発行(初版)、新竹州編、立川文明堂 | 021 } 030 |
| (5) | 【第一部第一章】『ニッポンゴ一』 昭和18年1月28日発行(初版)、海南海軍特務部編、博文館洋行 | 031 } 034 |
| (6) | 【第一部第一章】『ニッポンゴ二』 昭和18年2月20日発行(初版)、海南海軍特務部編(ママ)、博文館洋行 | 035 } 043 |
| (7) | 【第二部第一章】『日清会話 附軍用語』 明治27年9月17日発行(初版)、木野村政徳著、日清協会 | 044 } 049 |
| (8) | 【第二部第四章】『台湾語集(台湾日用土語集)』 明治28年7月18日発行(初版)、侯野保和編纂、民友社 | 050 |
| (9) | 【第二部第四章】『台湾言語集』 明治28年8月29日発行(初版)、岩永六一著、中村芳松編輯兼発行 | 051 |



(1) 【第1部】 S17.6.23 国語講習所用修身の本（卷一）「本扉」

- (10) 【第2部第5章】『海南島語会話』昭和16年8月15日発行（初版）、台湾南方協会編、山路円次・松谷雅監修、三省堂

 052

 055
- (11) 【第3部第3章】『新撰日華会話編』明治33年8月25日発行（初版）、岡本経朝・王鴻年編纂、須藤壮一郎発行

 056

 059
- (12) 【第3部第3章】『官話指南総訳』明治38年1月20日発行（初版）、呉泰寿著、文求堂書店

 060

 061
- (13) 【第3部第5章】『談論新編訳本』明治43年8月10日発行（初版）、岡本正文著、文求堂書店

 062

 065
- (14) 【第3部第6章】『官話急就篇詳訳』大正6年10月1日発行（初版）、大橋末彦著、上山松蔵発行

 066

 067



(1)【第1部】S17.6.23 国語講習所用修身の本(巻一)「十八 人物」(18頁)

272.1
~~271.1~~
29

モクロク

| | | | | | |
|---|---------------|---|----|-------------|----|
| 一 | テンノウヘイカ | 一 | 十一 | コッキ | 十一 |
| 二 | ヘイタイサンノミオクリ | 二 | 十二 | サウチノシカタ | 十二 |
| 三 | オシギ | 三 | 十三 | ウソヲイフナ | 十三 |
| 四 | シセイ | 四 | 十四 | トモダチ | 十四 |
| 五 | オハナシノシカタ・キキカタ | 五 | 十五 | ワルクチヲイフナ | 十五 |
| 六 | ジコクヲマモレ | 六 | 十六 | ワルイスメニシタガフナ | 十六 |
| 七 | ミナリ | 七 | 十七 | ヒトノマヘヲトホルトキ | 十七 |
| 八 | カラダヲキレイニ | 八 | 十八 | ヒトノモノ | 十八 |
| 九 | ミチヲアルクトキ | 九 | 十九 | ユウシノテムカヘ | 十九 |
| 十 | カタナ | 十 | 二十 | ヨイニッボンジン | 二十 |

(1)【第1部】S17.6.23 国語講習所用修身の本(巻一)「目録」(天皇陛下〜良い日本人)